

「がんの浸潤・転移 基礎研究の臨床応用」

北島 政樹 編集

東京大学医科学研究所・癌細胞学研究部

清 木 元 治

がん治療法の進歩によってがんの治癒率は着実に向上しているが、依然として国民の死因のトップの座を保ったままである。その原因のひとつが転移するがんに対する有効な治療法が確立されていないことによる。すなわち、診断の時点で既に転移が成立しているかどうか、治療効果を決定する大きな要因とならざるを得ない現状である。

がん遺伝子やがん抑制遺伝子の発見によってわれわれのがんに対する理解は飛躍的に高まった。また、最近では、がんの浸潤・転移に寄与する分子の同定も進み、基礎研究レベルでは実験的な転移を抑制するのことも可能になりつつある。そして、これらの研究成果が、実際のがん治療へどのように応用できるかに大きな関心が集まっている。このような状況において、慶應義塾大学・北島政樹教授の編集による「がんの浸潤・転移—基礎研究の臨床応用」が出版されたことは、臨床応用の立場から基礎研究を捉え直す意味でまことに時宜を得ていると言える。

本書はまた、わが国のがん転移研究会の総力を結集した成果でもあ

る。がん転移研究会は「転移を制するものはがんを制す」の目標に向かって1991年に設立された。本書の序にも書かれているように、第6回研究会会長の田原榮一教授(広島大学)は、基礎と臨床研究をインテグレートし、21世紀の転移研究の方向性を示すべく、研究推進活動部会を組織し、部会長として編者の北島教授が任命された。本書は、その部会活動の集大成でもある。

本書は、基礎研究の成果がどのようにしたら臨床応用できるだろうかという、臨床家の視点から一貫して編集されており、従来の書籍が基礎研究の紹介に重点を置き、臨床応用を従属的に取り扱っているのとは大きく異なっている。その分だけ、転移制圧に向けた臨床現場の研究者の強い意志を感じさせる内容となっている。3部から構成される本書は、第1部の「ヒトがん転移の実態」で、食道がん、胃がん、大腸がん、膵臓がん、乳がん、肺がんを取り上げて、各がんの特徴的な転移様式と治療成績を紹介し、最後に転移実験モデルとの接点と矛盾点を論じる。第2部が基礎編に相当するが、遺伝子

異常、糖鎖抗原、増殖因子、間質と分解酵素、接着分子、運動の各章の冒頭をそれぞれの分野を代表する基礎研究者が総論として概説し、臨床研究者が更に臨床サイドからみた知見を紹介する構成で、臨床的な視点から基礎研究を見るための一貫した工夫が凝らされている。第3部は「がん転移に対する治療の現況」として、肝動注治療、ミサイル療法、転移予知と予防、血管新生抑制、転移阻害薬開発の現況を紹介している。特に、血管新生制御と転移阻害薬の開発は転移研究成果のがん治療への応用の最前線としてトピックス性の高い話題である一方で、これらの臨床開発が欧米で先行しているのに対してわが国での対応が制度的な問題も含めて遅れていることに対する問題提起ともなっている。がん研究者にとって、転移研究が直面する当面の課題を整理するために最適の1冊である。

● B5 頁 352 図 145 写真 35
カラー写真 14 表 95 1998
定価(本体 10,000 円+税) ￥400

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)